

2009.FEBRUARY

あなたとFUJIを見つめるLIVE MAGAZINE

volume 27

Face to Face

〔フェイス トウ フェイス〕
笑顔でつなぐコミュニケーション

皆さん、富士山は好きですか？

イ・ファイ デジカメクラブ 主宰

小口 昭宣

Akinobu Oguti

お気に入り SHOP

素敵なイベントがいっぱい。

GOURMET

楽しく食事ができるお店が
たくさんあります。

朝日カルチャーシリーズ

「名将の決断」

Book information

こたつに入ってゆっくりと
読書をしてみませんか？

Smile3

大古田さんのご家族を紹介します。

Happy present

中本マリ 大石学

DUO CONCERT

Live at KÖLN



星野新聞堂





小口 昭宣 おぐち・あきのぶ

1956年3月7日 52歳
富士市生まれ

- ・e-phiデジカメクラブ 主宰
- ・日本写真家協会 会員
- ・日本旅行写真家協会 会員
- ・富士山百景写真コンテスト プロデューサー
- ・SBS学苑 講師
- ・富士山写真学校 講師
- ・富士市まちづくりセンター デジカメ講座 講師

1990年の半ばより世の中にデジタルカメラが普及してきた。それまでのフィルムカメラよりも手軽に写真撮影を楽しめることから急速に普及し、最近では携帯電話で写真を撮っている人をよく見かけるようになった。今では当たり前だが初めてデジタルカメラで撮影をし、その場ですぐに画像を見たときは大変感動をしたものだ。

従来のカメラは像を結ぶ所にフィルムがある。デジカメはフィルムの代わりに撮像素子（CCDやCMOSセンサー）を使い画像をデジタル処理して記録する。近年の飛躍的な技術革新によりフィルムカメラに劣らぬ商品位の写真が写せる様になったばかりか、大容量の記録メディアを使えば数1000～10000枚（実にフィルム20本分）もの写真がたった1枚の記録メディアに納まってしまう。これらの機能はコンパクトなポケットタイプから携帯電話、本格的な一眼レフカメラに装着され、みんなが便利に使っている。使い易いため、お手軽にメモリ代わりにデジカメを使う人が増えている反面、従来はプロセミプロの道具と思われていた一眼レフ型デジカメを屋外に連れ出し、桜や紅葉など自分の感動を自分流の感性で写真に残す人が増えていると言う。

小口さんは富士市の石坂にある株式会社「イ・ファイ」の代表取締役。写真制作撮影（撮影から画像処理）、各種デザイン、コンピュータ関連（システム関連・HP制作・

メンテナンス・教育）、など様々な業態でトータルにクライアントをサポートする会社である。

「写真に興味をもったのは父が持っていた一眼レフカメラがきっかけでした。当時ではまだ一眼レフカメラは珍しく、子どものころ大変感動したのを覚えています。写真が好きではあったのですが、写真部には入りませんでした。でも級友が写真部だったこともあり、写真部の暗室はよく利用させて頂きました。高校に入ってから山岳部に所属し、それから山の写真が好きになり散々撮りました。誰も行けないような山奥まで行き、誰も撮れないような風景を収める。次第にみんなが見ることが出来ない景色を撮影することに没頭していくようになりました。」

1989年、鹿島槍ヶ岳（かしまやりがたけ）に初雪が降った時に撮影した作品「鹿島槍の月」が出版社の目に留まり小口さんの山岳写真家としてのキャリアが始まった。

「若いころはゴツゴツした岩山や連山などに魅力を感じ、少々危険な場所にも行き写真を撮りました。正直、当時は富士山なんて面白くもなんともありませんでしたよ。しかし年齢を重ねていき、ふと地元の富士山より富士山を見た時、改めて富士山の素晴らしさに気付かされました。富士山のように一つの山として独立している山は日本にはそうありません。その

雄大な姿や独立峰として持つ曲線がたまらなく美しく見えました。また富士山は自然現象や四季により様々な表情を見せ、この富士山からいろんな場所からいろんな富士山を見ることが出来ます。いつも見ている山ですが、みんなが見ている富士山を美しく写真に収めることに魅力を感じるようになっていきました。自分の体力がなくなり山に登ることが出来なくなってきた事もあります。これまでの人生経験を活かして味のある写真を撮ることが出来るようになりましたね。写真を撮るテーマとして子どもでもペットでも何でも構いませんが、富士市にはこんなに素晴らしい富士山があります。ぜひ皆さんにも写真を撮る楽しみと題材として、この富士山を撮影して欲しいのです。」

小口さんはプロの山岳写真家として活躍する傍ら、現在は富士山百景写真コンテスト（富士市主催）にもプロデューサーとして携わっている。また2002年にはデジタルカメラの普及に合わせ地元の写真文化の向上を願って「イ・ファイデジカメクラブ」を設立した。現在は20名ほどのアマチュアカメラマンが在籍している。クラブは会費1ヶ月500円で月に2回の観評会とコンピュータによる画像処理技術講習を中心とした作品展などを開催している。確かな指導が好評で多くの支持を得ている。

「プロの写真家として地元に関わり、貢献したいという想いは常にありました。写真は芸術だと私は思います。いい写真には撮影した人やそれを見た人を笑顔にする力があります。芸術に触れ心が豊かになることで皆さんの生活が楽しくなれば、人生も楽しくなるかもしれませんね。しかもデジタルカメラが誕生して経済性の面や技術面でも気軽に写真を撮れるようになりました。2002年頃にはデジタルカメラの画像が600万画素を超え、コンピュータを使って様々な画像処理が可能になりました。そこで『イ・ファイ デジカメクラブ』では写真をもっと楽しんでもらいたいと願い、撮影技術と画像処理（写真の色調補正や合成）の両方を教えています。もちろん、その他のことでも解らないことがあれば『イ・ファイ デジカメクラブ』はいつでも皆さんをお待ちしております。写真のことが何も解らなくても構いません。写真を楽しんでみたい、もっと人生を楽しみたい、そんな方は大歓迎です。」

今年、は年初から不景気で世の中が沈みがちである。一方でIT化は進み世の中はどんどん便利になっていくのに対して、心の豊かさが失われどこか寂しい世の中にも感じる。1枚の写真に感動をする心を持つている人がどのくらいいるのだろうか。たまの休日にカメラを持って感動を探しに行くことができれば、心豊かな充実した時間が過ごせるようになるかもしれない。

毎月第2、3火曜日の夜に株式会社「イ・ファイ」内で開催。主に写真の観評会、パソコンを使用した画像処理技術の講習をしている。パソコンの講習では「Photoshop」という画像処理ソフトなどを使用し、写真の色味を調整したり、合成などを紹介。皆さんデジタル写真の魅力と楽しさに毎回感動をするという。



イ・ファイデジカメクラブの皆さん

毎月第2、3火曜日の夜に株式会社「イ・ファイ」内で開催。主に写真の観評会、パソコンを使用した画像処理技術の講習をしている。パソコンの講習では「Photoshop」という画像処理ソフトなどを使用し、写真の色味を調整したり、合成などを紹介。皆さんデジタル写真の魅力と楽しさに毎回感動をするという。



イ・ファイ デジカメクラブ 展覧会

場所: 中央図書館 別館にて
日時: 2月11日～15日
am9:00～pm7:00
入場無料

イ・ファイ デジカメクラブ事務局

富士市石坂438-10
0545-23-0350
<http://www.e-phi.com>





夜明けの序曲

平成20年11月14日 6時19分 御殿場市 乙女峠

富士山頂に夜明け前の微光が到達し始める。夜の帳の終わりを告げる僅かな光である。このトワイライトな時間、荘厳な夜明けの序曲にゆっくりと満月も光を失いつつ、富士山頂と満月が絶妙なハーモニーを奏でる。
万葉の時代から私たちは、月へ憧れ、尊敬、畏怖を抱いてきた。

「東の野に かぎろひの立つ見えて かへり見すれば月かたぶきぬ」 柿本人麻呂
西の空に沈む満月、東から上がる太陽、毎月繰り返される光景であるが、富士から箱根に向かう道すがらは、万葉の歌人、柿本人麻呂の歌を思い出す。
素晴らしい夜明けと富士山に、この日も酔って、今日一日が始まった



春爛漫

平成20年4月1日 17時12分 富士市 龍巖淵

日本人のすべてが待ち望んでいた桜の開花の時期がやってきた。
切ないほど短い桜の時期に富士山と出会う確率は非常に少ないと思う。
しっかりとどっしりと紺碧の空に突き刺さる富士山と華麗に咲き誇る桜たち、待ち望んでいた景色が私の前に広がってくれた。
またいつかこの景色に出会いたいと思い、しばし富士山に見とれ、心に焼き付ける撮影となった。



大地の目覚め

平成20年3月22日 6時41分 富士市 今宮

富士山を仰ぎ観る景色の中でもお気に入りの場所がある。ゆったりと波打つ茶畑を前方に配置し、どっしりと構えた富士山、この構図は富士市を代表とする景色であり、私のお気に入りの場所である。
朝日の揺らぎが大地を照らすとき富士山は完全に光の中に神々しく輝いている。春先の淡い光が茶畑に注ぎ、森林や大地の影がやさしく落ちて、ゆっくりと大地は目覚めを迎える。
これから数分後、大地は光に包まれて富士山と一体化する。
毎日繰り返される自然の営みに感動を覚える



一本木と富士

平成19年8月20日 6時27分 富士市 高場所

富士山の写真は、出会いが肝心である。お気に入りの場所で、お気に入りの画角に納めなくては富士山写真家とは言えない。そんなこだわりを持っている富士山写真家の皆さんに我々プロはなかなか太刀打ちできない。
ある日そんな出会いがあった。私のお気に入りの画角に納まる富士山を見つけた。孤高を共通テーマとして富士山と一本の木で構成するシンプルな作品である。彩りも必要としない、木の生い立ちも必要としない、無名の中に富士山と共存する神々しさを求めて、この作品はライフワークの出発点となった